

Title	ジョージ・W・ロビンス 商業の起源に関する諸見解
Sub Title	George W. Robbins, "Notions about the origin of trading" (The journal of marketing January, 1947)
Author	片岡, 一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1951
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.5 (1951. 5) ,p.249(71)- 251(73)
JaLC DOI	10.14991/001.19510501-0071
Abstract	
Notes	紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19510501-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

sigue, 1945)。この亜麻工業は領土的起源のものであつて都市並びに農村において營なまれてゐたが、第十二、十三世紀に至り先づエイノーにおいて、後にフランドル及びブラバンにおいて、交易に附される規模のものになる。そして諸都市における毛織物工業が衰退した後、亜麻工業は農村の「新織物業」と相並んで最も重要な織物工業部門となつたのであつた。

上掲の Van Werveke 氏は中世フランドル都市織物業における商人＝雇主の役割と純粹な工業家の役割とを描いてゐる (De Koopman-Orderneer en de Orderneer in de Vlaamsche Lakenijverheid van de Middeleeuwen, 1946)。前者は工業支配人と遠隔地商人とを兼ね、羊毛を輸入し毛織物を輸出したが、第十三世紀の對英貿易の衰退と第十四世紀初頭の都市革命とによつてこの型の人々は没落する。後者の純粹な工業企業家も亦第十四世紀には、半製毛織物を買入れてこれを仕上げ且つ染色せしめる商人や中間的代理人によつて、とつて代られるに至るのである。尚故 Laurent 氏はイッブル市の毛織物生産のカーブは一三四四年まで上昇を続けその後著しく下降したと説いたのであつたが Van Werveke 氏はこれを訂正し、第十四世紀三十年代に大なる後退があつた後は同世紀を通じて生産は殆んど同一水準を維持したことを明らかにしてゐる (De Omvang van de Ieperse Lakenproductie in de veertiende Eeuw, 1947)。Doelhaerd 氏の第十三、四世紀における

アルプス以北の西歐諸國とチェノアの通商關係についての三卷の著書 Les relations commerciales entre Gènes, la Belgique et l'Outrenont d'après les archives notariales génoises aux XIIIe et XIVe siècles, 1941) も、フランドル毛織物工業の販路を採り上げてゐる。チェノアの經濟は大約一二五〇年まで外國商人——そのなかには多數のフランドル人がゐた——によつて支配されてゐたが、シャムパーニュの大都市の開始と共にフランドル商人は次第にチェノアに赴むこと少なくなり他方チェノア商人の北方に赴む者多きを加へた。然し第十三世紀末にチェノアの商船がフランドルや英蘭に航海し始めるに至つて、シャムパーニュ大都市の重要さは失なはれて行く。フランドル毛織物取引はこの第十三世紀の間にチェノアを他の伊太利諸都市の擔當するところとなる。そして次世紀においては伊太利諸都市は夫々毛織物生産を開始しここにフランドル毛織物の輸入は減少するに至つたのであつた。

織物以外の工業製品については Sneller 氏のロッテルダムにおける石炭貿易史 (Geschiedenis van den Steenkolenhandel van Rotterdam, 1946) が、船の底荷として用ゐられた和蘭煉瓦のバルト海地方、東西兩印度、北米への輸出についての Arntz 氏の研究がある (Export van Nederlandsche Baksteen in vroegere Eeuwen, Economisch-Historisch Jaarboek, XXIII, 1947)。又世界的に有名な和蘭球根の輸出の

歴史が Krelage 氏によつて發表されてゐるが (Drie Eeuwen Bloembollenexport, 1946)、同氏は和蘭における花卉の投機即ち一六三六——三十七年のチューリップ球根の投機及び一七二〇——三十七年のヒヤシンスの交易も考察してゐる (De Bloemenspeculatie in Nederland, 1942)。氏によればチューリップは第十六世紀末に土耳其から和蘭に輸入されたものであつた。

最後に白耳義・和蘭兩國にとつて特に重要な産業である漁業史の研究について附言する。即ち Degryse 氏は中世におけるフランドルの鱈漁業に關する研究を發表してゐる (Vlaanderens Haringbedrijf in de Middeleeuwen, 1944)。Kranenburg 氏は第十六——十八世紀の和蘭漁業とその漁獲物取引の組織とを問題にしてゐる (De Zeevischerij van Holland in den Tijd der Republiek, 1946)。獨逸ハンザの研究に關聯してこの分野に關心を抱く筆者にとつて、兩著いづれも一讀したい意欲に驅られるのである。 (一九五一・三・二八稿)

紹介

ジョージ・W・ロビンズ

「商業の起源に關する諸見解」

(George W. Robbins)

“Notions about the Origin of Trading”

The Journal of Marketing January, 1947

片岡 一郎

商業の起源如何の問題は、經濟史家の側からも亦商業學者の間に於ても多年論究され、しかも尙未解決のまま今日に持越された問題の一つである。それは「原始時代の初期に對して、現代の商業の機能を追求し且つこれを明瞭ならしめんがために、そして同時に此の經濟行爲の基本的性格を發見しよう」とする意圖の下に提起された問題である。いまカリフォルニア大學のノズ氏は此の困難な問題を取扱ふに當り、從來歴史家に依つてロビとられて來た方法を「應批判的に省察し、問題の究明に當つて實證的資料によつて裏付けられた歴史的精密性を貫く事の不可能なるを指摘する。そしてかゝる方法を避けて謂わば社會學的な立場から解かうとしてゐる。

素々商業學の立場から此の問題が提起せられたのは「機能的

乃至倫理的見地から今日の商業の實際を評價」せんがためであつた。然し此の見地からする時、果して過去に於て提唱された商業の起源に關する諸見解を利用する事が積極的效果を持つてあらうか。ロビンズ氏は斯る疑問に對して、その理解は「販賣及び購入の倫理の研究にとつて果して缺くべからざる事であらうか、……又今日の經濟制度の下に於ける商業の競争と葛藤の問題に解決の光明を投ずるであらうか」といつて寧ろ否定する立場を採つてゐる。續いて氏は配給の技術的過程として「けななく「社會的機能の問題」としての商業の性格を規定しようとする。氏に依れば、それは販賣と購買との兩者を同時的に意味する楯の両面である。故にその何れか一方にイニシアチヴをとらしめんとするが如きは正しい見解ではあり得ない。ただ問題を簡單化するといふ意味に於いて販賣の側が採り上げられるのである。そこで販賣に關する從來の定義は大體法律的定義・實務的定義・専門的定義の三つであるが、ロビンズ氏はもう一つ別の定義を擧げる。それは「商業の眞の性格を最も明瞭に示すものである」。その定義に依れば、商業とは少くとも二人の人間の行爲を含む人間關係であるといふ意味に於いて、基本的には一つの交通である。又それが二人以上の人間が單獨では達成し得ぬ關係を造り上げるために行動するものであるといふ意味に於いては協同的である。更に取引は二人の人間の對等な意識的行爲の組織であるといふ點からすれば、それは一つの機構でも

ある。そして最後に附け加へらるべき條件は「その目的が經濟的なものである場合にのみ限られねばならない」といふ事である。斯くてロビンズ氏の理解する商業とは「經濟的目標を達成するために交通する協同的機構」であるといふことになる。ロビンズ氏は斯る商業の見地に立つて從來展開せられて來た諸見解の妥當性を問題とする。

商業の起源に關する諸見解中最も廣く支持せられてゐるものは本能説である。然し原始人は長い間競争的商業を知らなかつたし又現在に於てすら或る地方の農民にはこれを忌避する傾向がある。しかも斯る反證は多く擧げ得るのであるから、本能説は「極めて淺薄な説」であるとの非難を免れない。第二は戰爭説ともいふべきものである。これは集團の生存のための手段として戰爭を考へるのであるが、然し多くの原始民族の間に於ては、戰爭の報酬は個人的なものであり、又經濟的といふよりは心理的なものであるといふ意味に於て戰爭と商業とを結び付ける事は不可能である。第三は掠奪説であるが、商業は全く友好的な關係の人々の間に於て發達したのであつて、この説に對しては寧ろ掠奪が商業を阻害した例を數多く知つてゐるといふ事を指摘するのみで十分であらう。第四は贈與説である。原始社會に於ける贈與の實行がやがて交換の效用を知らしむるに至つたと做す此の説は、論理的的支持を受け得よう。蓋し贈物をするといふその雰圍氣は人間が交換の効用を理解する事の出来るや

うな納得出来るものだからである。第五は初期の經濟的交通の手段として周知の沈黙交易説である。これは純粹に經濟的動機から交易が行はれた事を示してゐる。そして又交換兩當事者に於て交換貨物に對する客觀的價值評價が行はれてゐたといふ事實は十分注目されねばならない。それは粗野であるとはいへ然し現存社會制度内の効果的な慣習として發見され發展せしめられたものであつた。第六は餘剩説であるが、此の説明も亦多くの點に於いて吾々を失望させる。即ち實際には原始的家族乃至種族に依つて餘剩が蓄積せられたといふ證據は何等存しないし、その所有者に社會的特權を與へた裝飾品や裝身具等の原始的商業が餘剩の結果であるとはいひ難いのである。最後に商業を財產概念の發展と結びつけんとする見解がある。今日の社會に於ける複雑な交換が十分進歩した財產概念を豫定してゐる事はいふ迄もない所であるが、さりとて初期の商業についても財產の概念が必要條件であつたといふのは誤りである。商業の必要と活動とが財產概念の形成に大きな役割を果した事は事實であり、これら兩者は共通的な性格を具有し、密接な關係の下に發展し來つた事は否定出来ないけれども、商業は財產の概念に由來するものであり財產の使ひ方であるといふのは、兩者の性格を混亂の中に包みかくす以外の何物でもない。

從來諸學者に依り展開された商業の起源に關する説は以上の七つに要約され得るが、此等の説に共通的な性格は社會科學に

ジョージ・W・ロビンズ「商業の起源に關する諸見解」

とつて受け容れ難い「實證的資料の裏付けに依らざる極めて「機械」的なそれである。商業の説明は、人間の性質、即ち人間が造り上げた制度を通じて彼の環境に適應せんとするその性質の中に求めらるべきである。人間の知識を追求せんとし、好奇心を満足せしめんとし、そして他の人間集團と共存せんとする普遍的永續的反覆的な人間の性格は、自ら彼の實際的生活様式を無限に擴大して行くものである。商業も亦人間の此の自然的傾向に係はらしめて説明せらるべきであり、それは從來説かれて來た如く本能の中に存するものでもなければ、況んや人間の知慧の中にのみ存するものでもない。それは人間の實際的生活活動の集積の結果形成されるその形態の中に求められねばならない。同時に商業が社會の普遍的現象として一般化するためには、此の能力が生活様式に與へる變化を民衆の習慣が受け容れ得るだけに成長してゐる事が必要である。

商業の起源を求めての以上の七つの説は何れも社會科學に於いては受け容れ難い方法的誤謬を犯してゐるとロビンズ氏はいふ。證據に關しては如何に寛大な態度を以つて臨んでも、現代の競争的商業と初期の交易との間に類似性を發見することは不可能である。商業の問題は特定の制度の枠内に於いて考察されなければならぬ。従つて今日の社會に於ける販賣の倫理が初期の社會のそれと結び付き得るものであるといふが如きは誤れるも甚だしき議論であると、ロビンズ氏は結論してゐる。

紹介

ゴットシャルク、クラックホーン、エンジェル共著

『歴史學・人類學・社會學における個人記録の利用』

(Louis Gottschalk, Clyde Kluckhohn and Robert Angell, "The Use of Personal Documents in History, Anthropology and Sociology." New York 1945. pp. vi + 243.)

渡邊 國 廣

本書は研究方法に關する極めて暗示に富んだ報告書であるが、實際には專攻を異にする三名の報告者による論文の集録であつて、それ等は社會科學の特定部門における個人記録の利用を自己批判的に報告するといふ共同課題に應ずるものであるけれども、三者はいづれもその表題の一部に「個人記録」といふ語を冠してゐる以外に内容的には共通する箇所が殆んどない。

本書は Social Science Research Council の Committee on Appraisal of Research による第三の報告書である。その第一の報告は Thomas and Znaniecki, The Polish peasants in Europe and America に対する Bruner 氏の批判である。

。そして記録取扱の最後の段階ともいふべき「総合」の過程を問題とする章において、歴史の記述方法を取上げてゐる。この章は歴史と社會科學の關聯を解説する最後の一章と共に、本論文を通じて最も注目すべき箇所である。

本書の第二論文はハーヴァード大學の Clyde Kluckhohn 氏による The Personal Document in Anthropological Science である。この論文の本来の目的は人類學における個人記録の利用を展望するにあるが、然し同氏は、「人類學者は經濟學者や恐らくは社會學者よりも一層多く個人記録を利用して来た」(P.79)にも拘らず未だこれを體系的に使用してゐなかつたといふ觀點に立つて (cf. P.102)、個人記録蒐集の技術を示したり、取扱上有用な豫備概念を授けたり或は個人記録を刊行する際の注意にまでも及んでゐる。これ等は獨り人類學に限らず社會科學全般に共通するものであるから、同氏の議論は、歴大な素材から具體的な知識を導き出すことを目指すどの人々にも歓迎されることとならう。そして若しも「些少な記事の集積が、縦令莫迦らしく見えても、根本的眞理に到達する唯一の正當な途である」(P.155)とするならば、同氏のごこでの説明は、些少な記事の眞偽鑑別乃至はその分析・綜合へ向つて有力な理論を興へるものであるから、根本的眞理への到達といふ目的の實現に資すること疑ひを容れないであらう。尙同氏の個人記録の定義は、詳細且つ嚴密であつて、このうちに含まれる

「歴史學・人類學・社會學における個人記録の利用」

9、第二の報告は Allport, The use of personal documents in psychological science であつた。これ等の報告書成立の直接の動機は、社會科學の素材としての個人記録の價値に關して幾多の疑問を提起したと傳へられる前記 The Polish peasant 以來喧しかつた問題——個人記録の利用に如何なる發展があるか、個人記録を分析する一層良い方法が發見されたか、個人記録は社會科學の如何なる種類の問題と關聯するか、個人記録は假設通りに處理され得るか、個人記録は社會學以外の社會科學において如何なる程度まで利用され得るか、研究者は個人記録から何を知らるか——に對し一應の決論を興へようとするにあつた。

扱へ本書におさめられた第一論文は、シカゴ大學の Louis Gottschalk 氏の The Historian and the Historical Document である。これは端的には歴史の方法に關する簡潔な論文である。同氏は、如何なる記録にも或る程度の人間性なり個性なりが盛られてゐないことはない (P.13) といふ觀點に立つて、個人記録のうち歴史記録の一切を含める。そしてこれ等の種々な種類の歴史の素材の定義に關して謂はば教科書的な説明を下してゐるが (cf. Pp.17-27)、氏は歴史家の問題を「眞の原本は何が」又「眞の原本とは實際に何をいふのか」に限つてゐるから (cf. P.34) その議論の中心は、記録の檢證・分析に必要な諸方法の解明に置かれることになつてゐる (cf. Pp.35-4

れるのは自傳・傳記・日記・印象記・書簡のみに限つてゐる。本論文の最初の部分に氏は、廣く散在するかかる個人記録のうち既に印刷に附されてゐるものを列挙してゐるが、この部分では本論文末尾の文獻目録と共に、初學者にも門外者にも至つて便利である。

本書の最後は、ミシガン大學の Robert Angell 氏による A Critical Review of the Development of the Personal Document. Method in Sociology 1920-1940 である。これは前述の Bruner 及び Allport 兩氏によつて提起された問題を發展させようとするものであるから (cf. P.177) 兩氏による研究の附録とみるべきものである。即ち本論文では、Angell 氏によつて「關係者が自己の關與した經驗に對して感想を記したものの」(P.177)と定義される個人記録に關してその取扱方法一般が問題となるのだけなく、かかる個人記録を利用する社會學者の態度の前進を前記 The Polish peasant 以後について見て行かうといふのが本筋である。かくて同氏は、この目的達成のために社會學者がその後に行なつた研究のうち特に二十二を選定し、それ等における個人記録の利用を評價してゐる。そしてこの前進が緩慢であつて決して急激なものではなかつたと断定する (cf. P.235)。本論文の最後の部分でこの阻碍條件が簡単に説明されてゐる。同氏は、社會學における複雑な個人記録の一層の利用のためには、何よりも先づ研究者自

七五 (三五三)